
メロスは激怒した。

HERON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メロスは激怒した。

【著者名】

N8159F

【作者名】

HERON

【あらすじ】

メロスと僕は仲がよかつたんだ。ある日の事件が起るまでは…

⋮

(前書き)

「走れメロス」とは何の関係もございません。

メロスは激怒した。

その過程がいかなるものであるか……

僕は叫びたい……

ある日、メロスの元気がなくなつた。
僕はメロスの元気な姿に惚れたのに……そうか。きっとあの二ことだ。

きっと僕達の親の不倫が原因だ。

あらうことが、僕の父親とメロスの母親には関係があつた。
実質、僕とメロスは義兄弟になつてしまつたのだ。

僕はその現実を受け止めている。なのに、メロスは受け入れようとせず現実から逃げている。

僕達の親は僕達の親だ。僕達は僕達だ。そこに壁はない。だから今まで通り仲良くやつていきたいのに……

だけじゃつぱり、メロスにとつてはその現実が受け入れ難いのだろうか。

そのことで毎晩毎晩悩んだんだが……

ある日、メロスと旅行に行くことになつた。幸い付き添いには、僕とメロスのおじいちゃん的存在のペリツツア＝ケン＝忠志（僕らは忠志じいちゃんと呼んでいる）が来てくれるとなつた……

旅行は一週間後、それまでにはメロスとの壁も壊しておかなければ……

「メロス。一週間後だね」

「そうだな。俺達は義兄弟だもんな。こうなることは仕方ないことなんだよな……」

やつぱりメロスは現実から逃げている。この先大丈夫だろうか。

旅行に行く前の一週間が長かった。頭の中では旅行に行きたくな
いと思っていた。

そして、旅行が一日前に迫った頃、信じられない出来事が起つ
た！

なんと、僕の家にメロスとメロスの母親が押しかけてきたのだ。
あいにく、僕の母親はのんびり屋な性格だけあって、父の不倫の
事は知らなかつた。

それが幸いしてか、父とメロスの母親のぎこちない態度にも、終
始笑顔だつた。

しかし、悲劇は起つるものなんだ。僕はこれまでにメロスを
恨んだことはない。

多分、メロスはぎこちない空氣に耐えられなかつたんだ……

「もういいじゃないか！隠し事はやめろよー。俺達は知ってるん
だぞ。息子達は知ってるんだぞ。お前達の汚らしい真実をな……」

終わった。もう、旅行どころではない……

いつそこの場から逃げよつか……

遅かった……僕が「」のよつなことを考へて、聞に話せびとびる
進展して……

「僕は……」

僕が言葉を発しようとしたその時には、既に僕の想像を遥かに超えるよつな事態に……

不思議なもので、いつこいつ修羅場の方が話は弾むものなのか。
いつもはのんびり屋な母親が目を真っ赤に充血させて叫んでいる。
いつもは厳格な父親が土下座で謝っている。当然、メロスの母親も
一緒に……

僕はようやく今の事態を理解した。メロスはいったい今の事態を
どう思つていいんだろう？ 僕は、さつとメロスを見た。偶然な
か？ メロスも僕を見ていた。

そのとき僕はあのメロスの冷めた眼を見て感じたんだ。現実から
逃げている男とは思えない。何を考えているんだろう？ ……？

だが、考える暇があるはずもない。躊躇なく鉄槌をふり降ろした
のは、今までに見たこともない母親の姿だった。

「これは……わたしに対する裏切りなの……？ それとも……夢な
くて事はないでしょうね……？」

僕は、これほどまでメロスを憎んだことはない。

あらうことが、なぜ……今このタイミングで……君は……眞実を
吐き出してしまったんだ……

「すまん……つい魔がさしたんだ。もつそんなことはしない……だ

から……

「本当です！ ちょっと遊ぼうと思つていただけで……そうしたら流れで……」

もう駄目だ。メロスのせいだ僕達の家族は終わりだ。もう、この場にはいたくない。

「なに本当のことこつてるんだよ」

「しかたがなかつたんだ。隠しているのが嫌になつたんだ」

「お前つて……最悪だな」

無我夢中に外に出て行つた。

僕は、あの状況で一体なにができた！？

メロスと仲直りし、全てが一件落着すると思つていただけに、そのショックは大きかつた。自分の思いが、こんなにも届かないなんて……

頭がパニックになると、どんな人物の思考の中にも闇が芽生える
…………それを信じることすらできはしなかつたのだ……
力が急に抜け、眼が異様に熱くなつていくるが、時間が過ぎ去る
とともににはつきりとしてきた。

僕は無力？ 人の心の闇の前には。これは誰のせい？ そうだメロスだ。全てはあいつだ。

もう、僕が戻る頃にはきっと……戻ろつ。多分そこは。

「遅かつたじゃないか。もういなによ。うるさい馬鹿達は

やつと分かってきたよメロス。君は現実から逃げてなんかいない。

逆だ。受け止めすぎたんだ。全てを君は終わらした。

床に広がる汚らわしい血痕。返り血を浴びた君の姿。

「全てを自分で背負い込んで自分で解決して満足かメロス?」

「……辛いよ。どちらかがやらなかつたら」

血だらけのメロスや床についた血痕をみたときに自分の弱さにきづいた。

「ここの後……どうする?」

僕は悩みながらも、この質問をしてみた。

すると、メロスは返り血のついた顔をくぐらかこちらに向けて、楽しげに話した。

「人つてのは、案外簡単に死ぬもんだね。この後か……そう……死人は一番困る。なんせどう処理すればいいか試行錯誤を繰り返さないといけないからね」

その声にはすがすがしさが漂っていた。僕のいつもの調子では、発狂してしまう程の解答だったのかもしね……しかし、今は違つた。

「僕にいい考え方がある……」

「お前の考えがどうであろうと、俺はお前の考えに従つつもりはない。つまり、お前はいらなし」

メロス。君は快樂の餌食になってしまったようだ。でも、これも運命なのかな。

「そうだねメロス。奇遇にも僕も同じ。僕の考えはただ一つ。メロス。お前が死ねば試行錯誤を繰り返す必要なんてないだろう。つまり、お前はいらない」

僕はもう迷わない。もつ、君のそんな姿を見ているのは嫌なんだ。僕は今の君が大嫌いだ。だから君は死ぬ。

それもこれも全てメロス。君のせいだ。だから……僕は激怒した！

メロスは手に持っているナイフをこっちに向かえた。僕はテーブルの上にあるピンを割つてつけた。

「まで……」

二人の死線を葛藤が貫いた。

『忠志じいちゃん！？』二人は同時に向きを変えた……

「やめるんじゃ……やめるんじゃ……」

忠志じいちゃんは、錯乱したように同じ言葉を口だまする。

僕は忠志じいちゃんの事は嫌いじゃない。出来ることなら……

「困ったなあ。俺はあなたに恨みはない。でも、こんな状況を見られちゃつたら仕方ないよね！？」

メロス。君はすぐに僕の期待を裏切るね。本当イライラする。でも、だからこそ、忠志じいちゃんには感謝したい。

僕には今、守りたい人がいる。快樂の餌食になつたメロスから忠志じいちゃんを守りたい。その一心で僕は動ける！

僕は忠志じいちゃんを守らないと！

僕は忠志じいちゃんを背にメロスから守つた……

「えつ？」

僕の背中に違和感が……なにが起つた？ そうか……どうして？

「忠志じいちゃん……どうして……？」

僕は忠志じいちゃんに刺されたんだ。

そこには、もう僕の知つてゐる忠志じいちゃん。そして、メロスはいなかつた……僕は……？ それも分からぬ……

痛みより、恐怖が僕をあおりたてた……目の前の光景、次第に遠のいていく意識……この手には……まだ……のこつている

「…………」

気がつくと、見知らぬ場所にいたが、僕はそこがどこであるかすぐ理解した……

「気がつきましたか

看護婦が急ぎ足で一いつぱにせつてきた。
なぜ助かったのだろう。あの地獄とも呼べる場所からの生還は今考えれば皆無に等しかつた。

「背中の傷、痛みますか？」

思い出した……忠志じいちゃんは僕にナイフを刺したまま抜かなかつた……あの時は本当に殺されるかともおもつたが、もしかしたら……

今となつては、答えをみつけることは不可能だと言つたが、とつもなく虚しく感じられた……

でも、僕は動かなくてはならない。忠志じいちゃんの真意。そして、メロスを停止させてやらなければならぬ。

僕にはやらないではないことが多いすぎるんだ。どうしてどう。少し前ならこんなこと……なるばずなんかなかったのに……

「大丈夫です」

「そうですか。では痛み出したらコールしてくださいね」

看護婦は去つた。さあ、動こう。僕は動かなくてはならないんだ！

「立たなくていいい。俺は君のよく知る場所にいる」

脳内に響くメロスからのテレパシー。

メロス。もう、僕には分からぬ。君は一体何者だ？

僕は痛みをこらえながら病院をぬけだした。病院をぬける途中、無意識にある物を手に取つて……

歩きながらメロスは一体何者か考へるも答えがでない。

やつしてこむつに、あの恐ろしい家に戻ってきた。

一歩歩くごとに鼓動が凄まじく響いている。もう少しで、決着がつく……。己が全ての始まり……そして今、全てを終わらすために

……

扉が開いている。そこから少し入った部屋の扉も……そこに近づくにつれ、もう一度と戻れないことわかり始めた……

そこには、メロスが居た。義兄弟で一日後に旅を共にする約束していたあのメロスが……

メロスは激怒などしていなかつた。

むしろ、この世には存在しない異形の姿に変わり果てた彼は、心の底から笑っているように思えた……

「やあ。驚いたかい？」

「いや、君が人間じゃないと知れただけで少し安心だ」

「そうかい。なら、これないかい？」

メロス。君はもう……快楽とかそういう次元じゃない。嬉しいかな？ 僕に忠志じいちゃんの死体を見せ付けてそんなに嬉しいかな？ 君の笑顔は凍りついてる。君の嬉しさは快楽からきている……

「よかつた。驚いているみたいだ。お礼をいつておけよ。忠志じいちゃんは自分の身を捨ててお前を守つた。お前を死なない程度に刺して俺に殺したようにみせかけて、忠志じいちゃん自身は僕に……アハハ。お礼といつても死んでるね。血を垂らして死んでるね。そ

れでもお礼をいっておけよ？ 君は一度命を失つていの

「ウワア~~~~~」

僕は激怒を超えた。

「メロスお前は絶対ゆるさねえ！――」

自分が激怒で自分を失い、病院にいったときにあつた薬を思い出した。

僕はその薬を使い自分を失つた。

使つたら脂肪が筋肉に変わり、今まで想像できない姿になつた。

まるで生まれ変わつたようだ……頭からつま先までまるで違つ。僕は、なんで生まれてきたのか……そう思えるほどの激怒。

メロスは、それでも笑つている。

「こんなにも、こんなにも楽しい気分は初めてだ。いつそのこと、自分をも殺してみたくなるほどの気分だ」

メロス……君のその、心意気に惚れた僕が、今正しいとわかつた

……

「俺もそつだよ。楽しい楽しい楽しすぎぬ」

もはや、考えることすら不可能に近い状況に陥つていた。脳みそまでもが筋肉に変わり果てていき、考えるという文字すら浮かばなかつた……

その瞬間、僕の肩をメロスの右腕が貫いた！――

「肩が工えぐしくとおおおめ、じつイッタああ王のなノかあ」

それとほぼ同時に、僕の左腕は、メロスの心臓を握り締めていた。

「心臓の鼓動がきこえるかい？？ これこそまさに、激怒を超えた憤怒の快樂だといつものなのだ」

僕達の新鮮な鳴き声は、どどまる」とを知らなかつた……

もう、どうにでもなれ。肉は腐れ。骨は溶けろ。

僕達はもう快樂の奴隸だ。メロス。君が何者か……同じ舞台に立つてようやく理解できた気がするよ。

どうでもいいんだ。親が不倫していようが君が人を殺そうが、そんなのは……心の奥底ではどうでもいいんだ。

結局は争いたい。傷つけたい。破壊したい。そういう感情に結びつく。快樂の奴隸となつてしまつ……

ああ。もう、意識が失われていく。僕が僕ではなくなる。快樂に支配される。でもそれでいいんだ。

メロス。君は激怒した。そして、僕も激怒した。そして遂にそれすら超越した。ただ、それだけの話なんだから。

風景がうつすらになつてきた。

僕は幸せだったといえるのか……

最後の意識が声となつて表れた。

「みんなと仲良く暮らしたかったなあ

この事件は、人間の闇の部分をさらけ出し、なんとも残酷な終わり方をしてしまった。このあと、ここには快楽の奴隸となつた彼の石碑はもちろん。忠志じいさんの石碑、それから亡くなつたみんなの石碑が順番に建てられていつた……これで事件は解決した。誰もがそう思つたとき、彼の他にもう一人快楽の奴隸となつたメロスの存在に気がつく……

メロスは行方不明なのだ……この場のどこを探しても、メロスの死体はおろか、血痕、指紋すら探し出すことはできなかつた……

メロス……どこへ……それとも……最初からメロスの存在は……
いや、きっと今もどこかで……

メロスは激怒している……

(後書き)

今回は友達一人と俺で適当な分量でリレー小説をして作った小説です。

初めての試みのことで、色々と滅茶苦茶な展開になつておりますが、初々しいと感じていただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8159f/>

メロスは激怒した。

2010年10月10日14時53分発行